

私たちは神の子ども

[使徒言行録 11 章 19～30 節]

ステファノの事件をきっかけにして起こった迫害のために散らされた人々は、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで行ったが、ユダヤ人以外のだれにも御言葉を語らなかつた。しかし、彼らの中にキプロス島やキレネから来た者がいて、アンティオキアへ行き、ギリシア語を話す人々にも語りかけ、主イエスについて福音を告げ知らせた。主がこの人々を助けられたので、信じて主に立ち帰った者の数は多かつた。このうわさがエルサレムにある教会にも聞こえてきたので、教会はバルナバをアンティオキアへ行くように派遣した。バルナバはそこに到着すると、神の恵みが与えられた有様を見て喜び、そして、固い決意をもって主から離れることのないようにと、皆に勧めた。バルナバは立派な人物で、聖霊と信仰とに満ちていたからである。こうして、多くの人々が主へと導かれた。それから、バルナバはサウロを捜しにタルソスへ行き、見つけ出してアンティオキアに連れ帰った。二人は、丸一年の間その教会と一緒にいて多くの人々を教えた。このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである。そのころ、預言する人々がエルサレムからアンティオキアに下って来た。その中の一人のアガボという者が立って、大飢饉が世界中に起こると“霊”によって予告したが、果たしてそれはクラウディウス帝の時に起こった。そこで、弟子たちはそれぞれの力に応じて、ユダヤに住む兄弟たちに援助の品を送ることに決めた。そして、それを実行し、バルナバとサウロに託して長老たちに届けた。

[1] 母の日に思うこと

今日は「母の日」でもありますが、これはもとはどうも、アメリカの日曜学校が発端ということですが、現代はこれなかなか難しいですよ。母親を知らずに育ったりする者たちも多いですし、母親を知っていても、それが自分にとって厳しいことだという人々を私たちは傍観的にではなく、それこそ今の教会が受け止めてゆくべき課題として考えるということが大事なのかなと思っています。もちろん、これは父親に対しても言えることですよ。

私は、この二か月ほど前に母が死んで、生前母がバプテスマを受けた教会で告別式をさせて頂いたのですが、私が小学生の時（10才位）の、もうぼんやりとはありますが、でもとても印象が強かった出来事があって、そんなことも少しお話ししました。それは、母の「勉、死なないで～！」という母の声が脳裏に残

っているんです。たしか家族で豊島園のプールに行った帰りにお寿司屋さんに入ったんです。その時、私はタコがあたってしまって唇が腫れて腫れてしまって、すごくお寿司やさんが申し訳なきような顔をしていたのですが、その時はそれで済んで、家に帰ってから私は呼吸が苦しくなってしまって寝かされたんですね。その時の母の言葉なんですね。「勉強、死なないで〜!」。こうも言っていたと思います。「私が代わりになってもいいから」と。あの時の母はまだ30代後半だったのではないのでしょうか。幸い、時間の経過と共に落ち着いてきて私は死なずに今があるのですけれども、母の泣き声のような声が記憶にあるのです。私は母が死ぬ前日、施設の方から電話があつて「今ならまだお話が出来ます」と言われ、飛んで行って二人だけの時間を持つことが出来ました。そして、こんなことがあったね。その時のお母さんの声を覚えているんだよ、ありがとうねと言いました。そうしたら、「それは覚えていない」と言いました。何だ、覚えていないのかと思いましたが、今は、その覚えていない、というところに、母の愛を感じます。

[2] 「I was born」キリスト者

私も母親の胎から生まれてきた者ですが、「生まれる」という表現、これは英語ではハッキリと受動態なのですね。「I was born」です。そのまま訳すと「生まれさせられた」ということでしょうか。厳かな感じがあります。誰も自分の誕生の瞬間は覚えていません。それは神秘です。そして、私たちの命というのは、実は毎日毎日違うのだと思います。赤ちゃんを見ていると本当にそう思います。自分以上の力が確かに働いている。園芸をされる方などはきっと強く感じられると思います。毎日その花や樹木の命の現れが違っているということ。命は大きなところから「与えられるもの」なのだと思います。そして聖書は、**私たちは神の作品、被造物**なのだと語っているのですよね。

使徒言行録の今日の箇所はとても画期的な場面です。イエス・キリストの福音というものが、植物のようにしっかりと根を張ってきた。特に前の章の10章で、**コルネリウス**というユダヤ人から見ると外国人の百人隊長が福音を受け入れました。このことによってまず**ペトロが変えられた**のです。神様は、ユダヤという枠を超えて、イエス・キリストを救い主として表しておられるのだ、神様のみ心とは、ユダヤ人だけに向けられている訳ではない。ペトロは神様によって、偏狭な民族主義的な信仰理解を砕かれました。「自分たちだけが幸福であればよい。選ばれている」ということを福音は語っていないのだと。ここから**福音のダイナミックな命**が、まるでひよこが殻を破るようにして人々の中に広がっていきます。しかもそれは、人間的には逆境である迫害を受けることによって、異邦人に広がっていったということ、それが今日の**11章19節以下**に記されています。—「ステファノ

の事件をきっかけにして起こった迫害のために散らされた人々は、フェニキア、キプロス、アンティオキアまで行ったが、ユダヤ人以外のだれにも御言葉を語らなかった。しかし、彼らの中にキプロス島やキレネから来た者がいて、アンティオキアへ行き、ギリシア語を話す人々にも語りかけ、主イエスについて福音を告げ知らせた。主がこの人々を助けられたので、信じて主に立ち帰った者の数は多かった。」

そして、アンティオキア（シリア）で、イエス・キリストの福音を受け入れた人々の集まりが「キリスト者」と呼ばれるようになったというのですね。言語では「キリストエアン」。これはあだ名ですね。昔の日本で言われた「あれは耶蘇（＝イエス）だ」と同じようなものです。「あれは、イエスの者たちだ」「キリストに属する者たちだ」。とても本質を突いていますね。彼らは迫害の危機にも晒されながら、不思議な明るさを放っていたと思います。喜びがその交わりから感じられたのではないのでしょうか。これまで見たことのような人々の姿がそこにあった。ヨハネ福音書 3 章でニコデモの話が出てきますが、あの場面でイエス様は、「誰でも新たに生まれなければ神の国に入ることは出来ない」と言われましたが、イエス・キリストの福音を信じるということは、「新しい誕生」なのです。聖霊、神様の霊がそのことをさせて下さいます。自分の努力で新しく生まれることは出来ません。救いのための修行とキリスト教は無縁です。むしろ、救いとは、握りしめていた手を開くことです。「主よ、どうぞこの私という器の中にお入り下さい」という祈りが、新しく生まれることへの入り口なのです。「キリストと結ばれる人は、だれでも新しく創造された者なのです」(コリント二 5:17)。

[3] バルナバにならって

この異邦人の地アンティオキアで、「キリストに結ばれる人々」、キリストに捕らえられることによって本当に自由にされた人々が次々に興され、生き生きとした交わりを形成している、その噂が遠くエルサレム教会にも聞こえてきたというのです。そこで一人の人が遣わされました。22 節のバルナバという人物です。今日は残っている時間、この人物のことを見てみたいと思うのです。彼は、それほど目立ちませんが、初代教会で実に重要なキリストエアン、キリスト者でした。23 節以下にこうあります。—「バルナバはそこに到着すると、神の恵みが与えられた有様を見て喜び、そして、固い決意をもって主から離れることのないようにと、皆に勧めた。バルナバは立派な人物で、聖霊と信仰とに満ちていたからである。こうして、多くの人々が主へと導かれた。それから、バルナバはサウロを捜しにタルソスへ行き、見つけ出してアンティオキアに連れ帰った。」—バルナバが、この異邦人の地で神様の恵みを確かに確認したということは世界伝道の新たな一歩になったのです。また、彼はサウロ(パウロ)とアンティオキアの教会を結びつけました。けれども、恐らく彼

は気負ったところは少しもなかったと思います。このバルナバのことが初めて出てくるのは4章36節です。彼は「慰めの子」と呼ばれているのです。4章の34節以下です。「信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。たとえば、レビ族の人で、使徒たちからバルナバ―「慰めの子」という意味―と呼ばれていた、キプロス島生まれのヨセフも、持っていた畑を売り、その代金を持って来て使徒たちの足もとに置いた」。

彼バルナバも、キプロス生れ、外国出身です。しかしイエスの福音を聞いて、自分の所有物を自分のためだけに用いることをやめて売り払い、それで新しいキリストの共同体を支えたというのです。そのような人々の彼は筆頭者です。これは強いられて出来ることではなく、自発的なことです。教会はこのような**自発的な献身者**によって作られます。会社のような儲けではなく、ただ神様の祝福が皆に伝わっていくために出来ることをし、出来る捧げものをする。喜びがなければ出来ません。ですから、彼はアンティオキアの教会にも遣わされ、「**神の恵みが与えられた有様を見て喜**」んだとある通りです。ああ、神様は本当に生きて働いていらっしゃる！ それをすぐに感じる信仰の目と心が彼にはあったのです。そして、その教会を養うためにはあのサウロ（後のパウロ）が必要だとピンときたのだと思います。自らサウロを探しにタルソスまで行って、説得して連れ帰ったというのです。そして丸一年共に伝道したのです。この時期の聖書の描写が「**バルナバとサウロ**」という順になっているのも興味深いです（11:30、13:2）。

その後、サウロは**パウロ**と呼ばれ、その賜物を存分に発揮して伝道をしていくわけですが、そのためにはバルナバという存在があったということを知りたいです。彼は独り身であったと思われませんが、「**慰めの子**」と呼ばれるほど、周りの者たちにも親しまれ、愛される人物だったのでしょうか。まあ、色々なタイプの人がいてキリストの教会ですけれども、ただ自分の命を「私はキリストのものだ」と、キリストに捧げて生きた人々によって、教会は続けられるのだと思います。そしてその**根っこにあるものは、キリストの福音**です。**罪の赦し**です！ そして週報にも書きましたように**イザヤ書 49章 15節**、「たとえ母が忘れようとも／わたしがあなたを忘れることは決してない」という絶対的な主のお約束です。何と幸いなことでしょうか！ 私たちはどの国籍であっても、肉の親が誰であっても、本質的にはただお一人の神様の子どもののです。まことの羊飼いに養って頂く羊なのです。私たちの命はちっぽけでしょうか？ いいえ、神様にとっては大きいのです！ 神様はその独り子をお与えになったほどに、犠牲になさるほどに私たちを愛

して下さっている。この愛を受けて、共に教会を作ってゆきましょう。お祈り致します。